

祖母の原爆体験記

川合美和(祖母から聞いた話、当時祖母30歳前後、広島市在住)

※これは川合氏が高校の授業で提出した、川合氏の祖母による体験記です。

※寄贈資料は、担当教員が清書した文章を印刷したものです。

※明らかな誤字・脱字(清書時の転記誤り)と考えられる箇所は、文意を損なわない範囲で訂正しました。

※文章中の【】内は、研究室で補足のために追記したものです。

先日、孫が突然に原爆にあった当時の事を話してほしいと申し、話を録音するからと云いますので驚きました。

私も当年 71 才のおばあちゃんで、日頃、静かに暮らしていて、お話も上手ではありませんし、イヤな事は忘れ、良い事を考えて暮らそうと自分なりの老人訓のようなものを、心の中で作って、毎日感謝の気持ちで暮らしております為か、記憶も思い出そうとしても、おぼろになっておりますし、政治的なむづかしい事もわかりませんが、支那事変【日中戦争の当時の呼び名】から引き続き大東亜戦争【アジア太平洋戦争の当時の呼び名】が始まり、毎日出征兵士^{しゅっせい}応召^{おうしょう}の方のお見送りも忙しくなっていました。その内、戦死者の遺骨をお迎えする日も多くなっています、食料難、衣料品不足等徐々に起こり、国は統制配給^{とうせいはいきゅう}を取り、お米 1 日 1 人当たり 1 合 2 勺【1.2 合。精白米では約 180 グラムに相当】位ではなかったかと思いますが、当然これで足りるものではなく、大豆、こうりゃん、馬鈴薯^{ばれいしょ}、玉ねぎ等、月日がたつと共に内地米に外米や麦が混ざるようになり、主食としての配給は地区で決まったお米屋さんで並んで買いました。

副食物も、魚、卵、野菜、果物他、調味料類、何でも 1 人当たり何グラムと決められ、人数(家族数)に応じて何百グラム、何本、何枚、何個というように配給されました。衣料品は、衣料切符が配付され、足袋^{たび}何足、生地何メートル、下着類何枚等、1 枚の紙に印刷されてありまして、1 人 1 枚の割で当たりました。それも、地区で決められた衣料品店の店頭、何日足袋配給、と張り出されると、又その日並んで買います。主婦も中々大変です。うの目たかの目で見えて歩き、買い漏らさないようにしなければなり

ません。時には、道を歩いていて、必需品の自由販売しているのを見つけて買う時もあります。そんな時は、神の恵のような、嬉しい気持ちになります。そして今、どこのお店で何々売っていましたよと、急いで帰って、御近所に知らせて上げたり、知らせて貰ったりします。

町内では、10 軒位(もっと多いかもわかりません)単位で隣保グループ(隣組)が出来ており、その内 1 軒隣保長がおられます。空襲がだんだんと烈しくなるとまいりますと、町内で防火訓練を何回もします。防火用水は各家にあり、防火服装をして、救急袋を肩にかけ、バケツに水を入れてリレー式に次々と渡し、燃えている所にかける訓練です。ケガ人が出来れば救急袋の中に入っている薬や繃帯を出して手当てをする訓練です。

以上は、神戸に住んでおりました時の事です、主人は神戸三菱造船所の機械課に勤務しておりました。戦争が烈しくなるとまいり、神戸造船所も空襲を予知してか、広島へ造船所を建設する事になり、主人が選ばれて行く事になり、一家は広島の社宅に入りました。

長崎からも神戸からも三菱から来た人達ばかりで、1 つの町が出来ておりました。晴天の日は厳島神社の鳥居が見えるという程、海辺に出来ておりました。広い公園もありましたが、そこには高射砲隊がおりました。私共の住所は南観音町と云う所でした。町外れから 2 キロ近く離れていたように思います。【爆心地から推定約 3.5km】

其の間は赤や青の洋館建ての家があり、異国情緒をただよわせている田園風景が見られました。聞けば、明治・大正時代、ハワイへ行かれて成功された方が帰って来られ、畑で野菜等作っておられ、のんびりと暮らしておられるとの事でした。いかにも戦時下を思わせる神戸と違って、日用品、衣料品も、神戸と違って人口が少ないせいか、ゆったりとしているようでしたが、月日がたつにつれ広島も緊迫してまいり、1 日に何回となく艦載機が編隊を組んで、我々の上空を飛んで行きます。B29 もうなるようなエンジンの音を響かせて通ります。主人も高校生の学徒動員で来られた人達を指揮し、土地の建設関係の人々と共に建設に励んでおりました。その内、敵も造船所と判ったのか、艦載機が何回となく造船所を目がけて来るようになり、近くの社宅の上空

も頻繁にきます。遠ざかるのを待つ日々になりました。

B29 の空襲もはげしくなり、昼も夜中もラジオから豊後水道を B29 北上中警戒警報発令、周防灘、敵機何機襲来、空襲警報発令と叫ぶように発令されますと、サイレンが鳴り響きます。すると隣保長がその度に隣保間をメガホンを持って大声で「警戒警報発令、空襲警報発令」と言って廻ります。解除の時も又同じく言って廻ります。

食糧は増々乏しくなり、副食品の配給も今まで 1 人当たり何グラムと当たっていたのが隣保単位で来るようになり、当番の人が隣保に与えられた食料品を家族数に分けなければならなくなりました。当然分量は少なく、主婦は買い出しに汗だくの日が続きました。さつまいもの葉のじく、かぼちゃの葉のじく等食べられる物は何でも食べました。

敵は東京を空襲して、そして大阪を、3 月には神戸も何回か大空襲を受けましたとか。その内、呉も空襲された時は私共の所から、まるで、花火のように焼夷弾の落ちるのが見えました。いよいよ次はここかと思う気持ちは誰にもあったと思います。防衛部長さんが、呉から不発だった黄燐焼夷弾を持ってきて、「これがアメリカの黄燐焼夷弾です。今から爆発させるから、日頃の訓練のように、火たたき、ぬれむしろ等で消し止めて下さい。」と言われ、実物でするので皆緊張しました。いざ爆発させますと、木端みじんに飛び散り、ポマードのようなねばいものが、そこらあたりにひっついて燃えています。焼夷弾より一層始末の悪いものだと言う事が判りました。たった一発でもこのような事なのに、雨のように落ちて爆発したならば、どんな事になるか恐怖感で一杯でした。

市の方では、もし広島市が空襲を受けた時、今までの道路では消火活動に支障があると云うので、隣保から何人かずつが決めて出て、毎日、主婦達が交替で市内の家をこわす為、勤労奉仕をしました。立派な木材を使って黒光りしている旧家も、上からの命令には逆らえず、次々とかわされていきました。又広島市では学校も 7 月 1 日から空襲の危険を感じたのか閉鎖されましたので、小学 4 年生と 1 年生の娘 2 人を加西市の主人の生家へ縁故疎開させる事になり、加西は農村であり、学校へも行けるし、町のような恐さも味あわなくてもいいからと云い聞かせて、納得しておじさん

やおばさん、おばあちゃん達の所へお世話になる事になりました。色々と子供なりに体験した事と思いますが、後日、その時の事が良い経験として、自分の子供に教えていると思います。

そうしている内、8月6日の朝6時頃から警報が発令され、敵機来襲と云う事で空襲警報も発令されましたが、広島市は艦載機以外に大きな空襲も受ける事なく、その朝も徐々に警報が解除されたのでヤレヤレと思った時でした。急に聞き馴れない大きな音がしてきました。まるで飛行機が墜落して来るような異常な音に、思わず防火用具のある場所へ走って来たトタン、爆発音と共に真っ赤に燃えた夕焼け色の光が身边をおおいました。余りの不意打ちに驚き、棒立ちになった時、市内の方からビシッ、と云う感じの爆風が来て、屋根瓦も壁も飛ばし、餅箱に配給の大豆を一杯入れて置いてあったのも、どこかへ飛んでいき、タンスだけが重みに耐えていたのか、戸びらは破れ傷ついた姿で立っていました。6才になる長男は私のそばを離れると危険だと思っているのか、その瞬間も自然に私のそばに立っておりました。

何事が起こったのか判らないまま、無意識に安全地帯にのがれる心が働いて、そばにいる子供を小脇にかかえ、防火用具と救急袋をつかんで防空壕^{ぼうくうごう}へと走り込み、じっと耳を澄ませて外の様子を伺っておりましたが、あたりはシンと静まりかえって物音一つしません。不安の内に、何か額に温かいものが流れるので、手をやってみますと、それは血でした。驚いてしていた前掛けでふきましたら、初めて痛さがわかりました。自分がケガをしている事もわからないくらい、気が動転していたのですね。見れば爆風側に向いていた腕にも無数のガラスの破片がつきさざっていることがわかりました。そっと顔を手探りで1つ1つ抜き取りましたら、ますます血が吹き出し困ってしまっ、ふと目の前の防火用水に気がつき、用水で顔や腕を洗いますと、有り難いことに血は止まりました。今でもその時の名残のキズ跡があります。子供は幸にも私の陰で傷一つおいませんでした。

しばらくしている内に防衛部長さんがメガホンで、「皆さんケガはありませんかぁ」と大声で廻ってこられました。不安におびえていた人達は、咄嗟の出来事に声も出なかったのだらうと思います。皆はその声を聞いたトタン、地獄で仏に会ったような気持ち

になって安堵したのか、「ヤラれました」、「私もヤラれました」と言って、一斉に飛び出して来ました。見ればどの人もどの人も皆血みどろでした。中には、のどに大きなガラスの破片が突きささって、亡くなられた方もありました。市内の方を見ますと、今まで立ち並んでいた家が、あとかたも無く広々とし、煙か土ぼこりかわからない色をしたものがもうもうとしておりました。しばらくして1人又1人町の方から、この世の人とは思えないような姿で社宅の方へ向かって、おぼつかぬ足取りで来る姿が見えました。髪は焼けちぢれ、服はちぎれてワカメのように垂れ下がり、全身ヤケドのような、灰の中をくぐりぬけて来たような色をしていました。爆心地から少しでも遠い程、被害は少ないのです。南の方の被害の少ない家屋の中に救いを求めに来た人達を収容しましたが、手当ての仕様もないままに、「水、水」と言いながら、皆亡くなっていきました。最後まで、安全地帯と思って必死の力を振り絞って、此の所まで辿り着いたのに、あとは涙しかありません。

その内、主人が車輪のゆがんだ自転車に乗ってガタガタしながら帰ってまいりました。顔を見たトタン「あっ命が助かったのだ」と云う喜びで何も言えませんでした。見れば、ゲートルの上まで血がにじんできておりました。命が助かったということは、少々ケガは何でもないように心の中で幸せを感じていたと思います。

ちょうど8時15分、主人は出勤して、2階の自分の机に座った時、原爆の爆発を見たそうです。真っ赤な光と爆風、その直後、茸のような形の雲がもくもくと空高く上っていったそうです。なぜ主人は、はっきりとこのように爆発を見ることができたのでしょうか。又、私が光を浴びながらヤケドをしなかったのかを考えてみますと、それは爆心地から4キロか、5キロ位離れていたからだと思います。雷の場合でも、光と音とは距離によって違うように、光と爆風との間に、2、3秒間があったから、光の時はまだ屋根があり、2、3秒遅れて、強烈な爆風によって何もかも吹き飛ばしていったと思います。この貴重な2、3秒は、私達を救ってくれたのです。ほんとうに有り難いことでございます。

カチカチと二度か三度の間に命が左右されるのですから、時間の有り難さがわかります。又広島にひち山【比治山。標高71.1m。爆心地から約2km 東南】という山が

あります。この山の向こう側は被害がなかったと聞きました。少しの障害物でも差が違ってきます。

ちょうど 6 日は学徒動員で、広島市の高・中の学生は全部、市内の勤労奉仕に出た日でした。私の隣保にも、高・中と 2 人の娘さんが被爆され、行方不明になり、お隣りの 5 才の子供さんは、朝早くから表で遊んでいて不幸にも光線を浴びられ、全身ヤケドで高熱のため、ウワ言をいう状態でした。そのお姉さんが中学生で行方がわからず、お父さんはワラジ履きで来る日も来る日も町へ探しに出かけておられましたが、ある日瀕死の状態の我子を見つけられまして、皆大喜び致しましたが、とうとう 2 人共亡くなられてしまわれました。人が亡くなったと申しまして、お葬式も出来ず、身近な者の手で、近くの川の土手で、木を燃やして火葬しました。人の焼けた臭いのきついこと、何とも表現出来ません。

広島市全体が、その臭いの中にあっただのです。

電気は切れ、電信電話は不通、水道は止まり、食糧は入らず、親戚とも音信不通となっていました。加西の里の人達も、広島と長崎が一発で全滅したとの報で、両親は死んだと思って、この 2 人の子供をどうしようかと悲観にくれておられたようです。

私達は一瞬の内に、原始人のような生活に変わってしまいました。先ず水です。庭を掘って出た水を、砂やじやりと少しずつ大き目の石ころを水がめに入れ、下に穴を開けて栓をして、上から水を入れますときれいな水が出てきます。大切な飲料水です。お米は近くの川で洗って、最後に飲料水ですすぎ、木を拾ってきて炊きました。その川は原爆にあって、死んだ人が流れてきましたが、気持ちが悪いなど言っておれません。生きる為には贅沢は言えません。川があるだけでも有り難いのです。

私共も何か生活の道を考えねばならず、幸にして加西に^{たんぼ}田圃を持っておりまして、で、農業をすることに決めました。帰るにしましても、広島駅まで徒歩です。崩壊した家屋、焼ける物は皆焼け、くすぶり、死体も家屋の下敷きになっているのや、焼け焦げのや、生焼けのもの、ちょろちょろと炎も出ております。その異臭と、異常な光景を細目で見ながら、市電も線路の上で立ち往生したまま、黒焦げの残がいです。暑さのために、^{はえ}蠅が湧き背中一面ゴマをふったようにたかります。大ヤケドした人が汗と生

汁が吹き出し、繃帯の間から流れ落ちています。悪臭を放ちながら、ほんとうに憐れな姿です。さて、駅へ来ましたが、鈴なりの満員の汽車に乗るには、窓からしか乗れません。私が先に窓にかきのぼり、子供を引っ張り上げ、主人共々無事に乗り、帰るといふ前ぶれも出来ないまま、子供達のいる故郷へと向かいました。勿論、皆さん死んだ者が生き返ったように喜んで下さいました。

それから 40 年たちました。色々、苦難の道ではありましたが、困った時には、その時の事を考えますと、心の励みになりました。

今一番悲しく思いますのは、敗戦によって民主主義をはき違えて、利己主義になったことです。規律は乱れ、秩序は乱れ、中には目上を尊敬せず、目下をいたわらず、暴力を振るい、弱い者をいじめ、弱い者もすぐ死を求め、毎日困った事ばかり報道されるのを聞いておりますと、嘆かわしく、昔が懐かしくなります。以前はもっと意志が強かったものです。電車に乗っても、我先にと降りる人を待たず、押し分けて入るといふことは無かったのです。でも全部ではありません。親切な方もおられます。見習ってほしいと思います。何も彼も充分過ぎる世の中に甘んじる事なく、餓死している国の人達の事を思えば、ほんとに有り難いと思います。

次に原子爆弾の内容を一寸書かせて頂きます。

【以下、記載内容を基に再構成】

○広島に投下された原爆「リトルボーイ」

諸元

- ・全長:約3m
- ・総重量:約4~4.4t

爆発エネルギーの配分(核爆発について示される一般的な概算値)

- ・爆風:50%
- ・熱線:35%
- ・放射線:15%

核分裂によって放出されたエネルギー

- ・搭載された高濃縮ウラン約64kg のうち、約1kg 未満のウラン235が核分裂したと

推定される。

- ・ウラン235が 1g すべてが核分裂した場合に放出されるエネルギーは、石炭約3t を
燃焼させた場合に相当すると概算される。

原子爆弾の投下

- ・投下高度：約 9,600m
- ・炸裂までの秒数：約 43 秒
- ・炸裂高度：地上約 600m

(1986 年(昭和 61 年)2 月)

警報の解除 安堵の不意をつき

悪魔の原爆 地獄図のごと

警報の解除 安吐の不意をつき

轟音爆烈 目をおふ光り

目のあたり 地獄見まいと 目は伏せど

人焼ける臭ひや いかにしがたき

よたよたと ちぢれし毛髪 皮は垂れ下り

水一滴と求めさまよう

楽しげに 朝日を浴みて 遊ぶ子の

上に熱線 哀れ死の床

(お隣りの5才の子供さん)

灰じんの 中より湧きし ハエの群

人探す背に むらがり止る

美しく 真赤に燃えし 夕焼も

我には悲し 原爆の色

世の破滅 知りつつ米ソは 今もなほ

負けじと競ひ 止るを知らず